地域の行事に参加する

荻純忠さん・富美恵さん

荻純忠（おぎすみただ）さん（77歳）・富美恵さん（70歳）夫婦は18年前、自然豊かで海も遠望できる立地と環境のよさに惚れ込んで、千葉県から楢葉町山田岡の大坂行政区に移住しました。原発事故で避難を余儀なくされても、避難指示が解除されるとすぐに自宅に戻りました。

行政区では春・夏・秋の年3回、清掃活動があります。共同墓地、水道施設、集会所などの草刈りや掃除を行います。すでに帰町した世帯だけでなく、ときどき避難先から戻る世帯からも1～2人ずつ出て、ともに作業に従事します。

作業は朝7時半ごろ開始し、1時間あまりで終了。その後、集会所の敷地で慰労のお茶飲みをします。

清掃活動について住民たちは、「地域をきれいにするだけでなく、私たちのつながりを保つ大事な機会」と口をそろえます。

荻さん夫婦は、移住以来、こうした行事に毎回参加しています。

「地域で孤立して暮らしていくことはできません。こちらから地域住民の輪のなかに飛び込んで、つながりをつくらないといけません」と純忠さん。

行事に参加するだけでなく、普段から周囲の人たちに積極的にあいさつし、ときには自宅に招くなどして親交を深めるよう心がけています。

大坂行政区の清掃活動（2016年8月7日）。墓地や水道施設、集会所の草刈りや掃除を行います。終わった後は参加者全員で慰労のお茶飲み

富美恵さんは、「私たちは元々、人の集まりに出かけたり、家に人を呼んだりするのが大好き。楽天家ですからね」と言って笑います。

避難先でも同じように、周囲の人たちと交わりました。避難先は、いわき市貝泊（かいどまり）地区という山あいの農村集落でした。大型犬を3頭飼っていたため、あえて山間地を選んだそうです。こちらでも集落の行事があれば、常に参加。ゲートボールのクラブにも加わりました。町の自宅に戻ってからも、純忠さんは週に1度は貝泊に通い、ゲートボールを続けています。貝泊の友人たちを自宅に招待することもあります。

移住、避難、そして帰町。どんなときもいきいきと暮らすために、つながりを大事にしています。

地域の行事に参加することは、単に住民としての義務や責任というだけでなく、いざというときに支え合える関係を築いておく意味もあります。お互いを見守り、困りごとがあれば声をかけ、手を差し伸べられる住民同士の関係をつくっておくことは、高齢になっても自宅で暮らし続ける可能性を広げてくれます。